

第 352 回研究報告会 (10 月 31 日)

『教団付置研究所懇話会』の発足の意義と 20 年の足跡

堀内 みどり

10 月 17 日に教団付置研究所懇話会第 20 回年次大会が、浄土宗増上寺を会場に開催された。報告会では、大会の様子とともに、教団付置研究所懇話会の発足の経緯と 20 年の活動を紹介し、今後の課題について検討した。この懇話会におやさと研究所はオブザーバーとして発足当初から参加している。今大会は、「これからの社会と宗教—SDGs の潮流の中で—」というテーマのもと、曹洞宗、立正佼成会、金光教、真如苑、日蓮宗からの発表があった。それに先立ち、20 回の年次大会企画として、懇話会発足に至る経緯について齊藤泰大本教学研鑽所主幹、藤丸智雄浄土真宗本願寺派総合研究所元副所長、武田道生浄土宗総合研究所元主任研究員による対談があった。

懇話会は、「現代における宗教の役割研究会 (コルモス)」に参加していた宗教者であり研究者でもあった有志が、教団付置研究所の横に連なる機関によってお互いの情報と意見を交換しながら、社会の諸問題に対応できるようにとの思いが結実したものであった。

2 回にわたる準備会を経て、19 会員研究所と 8 オブザーバー研究所が参加して懇話会は発足した。現代社会の課題に対応すべく、それぞれの立場を尊重しつつ協力する可能性を探り、そしてこうした動きが教団の差を超えて日本社会に「真の宗教性の復権」をもたらすことに資することを願ったという。当初より議論されたのは宗教者でもある研究者の領域についてであった。

懇話会は、生命倫理、自死問題、宗教観対話の 3 つの研究部会を持ち、定期的な研究会を通してその結果を時宜に応じて発信してきた。本年度は SDGs をテーマとしての大会となった。宗教教団が社会的存在である以上、社会の抱える課題について、人が抱える困難について対応するに当たっては、懇話会の活動について教団内外での理解と認知が必要であると考えられる。

第 353 回研究報告会 (11 月 29 日)

「会議をうまくやる方法の教育と研究について、およびその背景について—「見ること」と「可能性」と「現実」の産出—

石飛 和彦 (人間関係学科生涯教育専攻)

今回の報告会では、2018 年の拙稿「会議をうまくやる方法の教育と研究について」(『天理大学 生涯教育研究』)をひとつの例にしつつ、その背景にある「見ること」、また「可能性」と「現実」の産出への関心について報告した。

拙稿では、「会議とは、発言等をつうじて組織の諸側面を可視化したうえで、それを議事録等のドキュメントに書き込んでいくミーティング」と、「会議」の再定義を行った。この定義は、「意見を語る人間」を消去し、会議を可視化と書き込みのプロセスとするものである。

その背景には、わたしたちがふつうの日常を「よく生きる」ことはどのようにして可能か、という問いがある。会議研究は、会議をケースとして、その問いに対して「現実の中に潜在する可能性を見だし、それを現実化して新しい現実を産出する」という方針を提示するものであることを示した。

報告会では、多くの質問や意見をいただいた。

2022 年度公開教学講座のご案内

— 信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ (8) —

2022 年度の公開教学講座は、オンラインで配信しております。

オンライン配信中

第 1 回 5 月	永尾教昭所長 151 話「をびや許し」	第 4 回 10 月	八木三郎研究員 108 話「登る道は幾筋も」
第 2 回 6 月	澤井真研究員 111 話「朝、起こされるのと」	第 5 回 11 月	森洋明研究員 119 話「遠方から子供が」
第 3 回 9 月	岡田正彦研究員 139 話「フラフを立てて」	第 6 回 1 月	堀内みどり主任 126 話「講社のめどに」

グローバル天理

第 24 巻 第 1 号 (通巻 277 号)

2023 年 (令和 5 年) 1 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒 632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan